

Booth No. 19

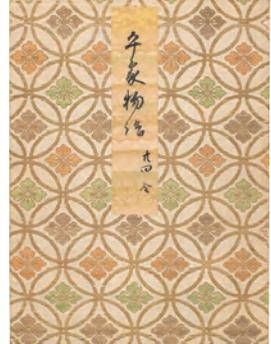
株式
会社

思文閣出版 古書部

SHIBUNKAKU PUBLISHING CO.,LTD

〒605-0089 京都市東山区古門前通
大和大路東入元町355
☎075(752)0005(代) FAX075(525)7155
e-mail: kosho@shibunkaku.co.jp
https://www.shibunkaku.co.jp/

355 MOTOMACHI, HIGASHIYAMA-KU
KYOTO 605-0089 JAPAN
PHONE(075)752-0005 FAX(075)525-7155



奈良絵本
1 平家物語 二十四帖 38,000,000円

寛文・延宝頃写 紙本金銀泥極彩色画
絵・二百六十二図(内見開図百二十七図)
金霞引金砂子散金泥下絵入料紙
各縦23.6種 横17.5種 綴葉装
黒漆塗菊流水模様金蒔絵箱幟箱入



2 奈良絵巻
うら 嶋 一巻

4,500,000円

寛文・延宝頃写 紙本金銀泥極彩色画
 絵・六図(内長大画一図)
 金泥下絵入料紙
 紙高33糎 長さ10米7糎 卷子装 箱入



3 大型奈良絵本
花鳥風月 一冊

桃山期写 紙本金箔銀泥極彩色画
 絵・八図(内見開四図)
 縦31・5糎 横21・8糎
 帙入 破損補修済

¥4,000,000



4 扇の草子 六枚

275,000円

室町末期写
三扇三首 紙本彩色画
各32×22.3種 未装 浸み・ヤケあり



5 異国物語画帖 一帖

1,650,000円

江戸中期写
紙本金泥彩色画 六十図
本紙各縦31.5種 横21.4種 総丈縦41.5種 横29種 折帖装 軾入



6 源氏八景 一巻

1,650,000円

〈詞書〉伝妙法院堯延法親王・広橋豊忠・醍醐昭尹等八名筆 金刷模様入金霞引箔散料紙
〈画〉石山基董画 紙本金銀泥彩色画 金刷模様入金霞引料紙
巻末に筆者目録あり
見返し・金箔散双鶴彩色画入
紙高32.4種 長さ8米10種 卷子装 箱入



7 女哥仙 一巻

3,000,000円

江戸前期写
紙本金銀泥彩色画 三十六図
金泥下絵入料紙
紙高33.3糎 長さ11米15糎 卷子装 箱入

8 藤房本
三十六歌仙絵巻 一巻

3,000,000円

江戸前期写
紙本彩色画 三十六図
紙高30.6糎 長さ14米62糎 卷子装 箱入



9 申年 祇園神輿洗滌物図 一卷

2,200,000円

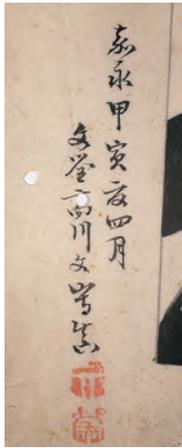
天保七年萬斎画
天保七年に行われた洗滌物を実見して描いたものと思われる。
紙本金泥彩色画 二十七図
紙高26.9糎 長さ11米14糎 卷子装 箱入



10 琉球聘使行列畧圖 一卷

7,500,000円

天保十三年写
紙本彩色画
紙高30.3糎 長さ5米10糎 卷子装 箱入



- 11 扇面
ペルリ・アーダムス・ホットメン肖像 一面 1,650,000円

嘉永七年高川文筆画 紙本金銀泥彩色画
本紙約縦18糎 横47.5糎 総丈縦33.6糎 横58.5糎 額装

高川文筆……信州松代藩御用絵師。名は森嶺。諱は惟文。画号、文筆。谷文晁門。黒船来航の際には警備に同行して黒船来航絵巻などを描き、その名を広く知られた。

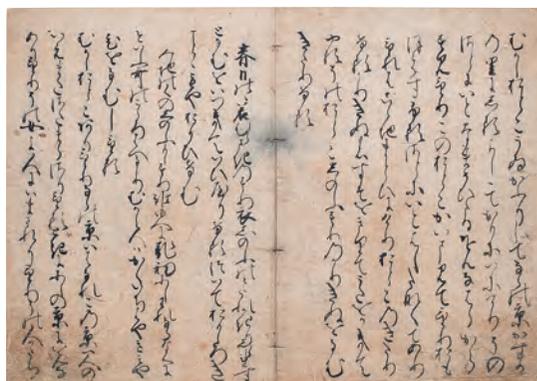
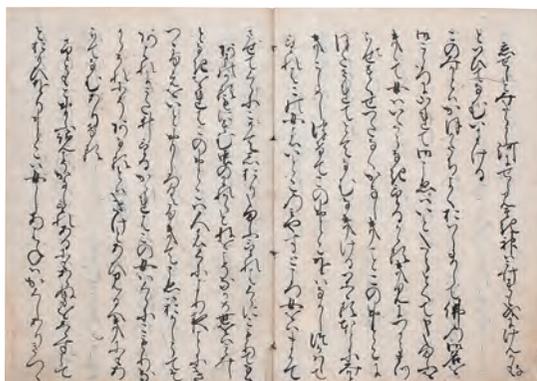


- 12 米艦入港応接之図 一巻 1,320,000円

伝上総国佐貫藩士三枝武助筆 江戸末期写
紙本彩色画

大正三年三枝眞哉識 伝三枝俊徳旧蔵

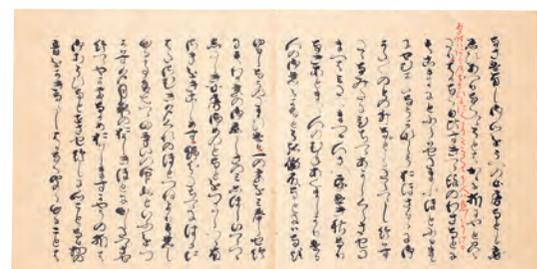
嘉永七年アメリカ合衆国横浜村応接之時異人上陸隊伍之図(未装、一巻)付
紙高25.5糎 長さ4米14糎 卷子装 箱入



13 伊勢物語 一帖

1,980,000円

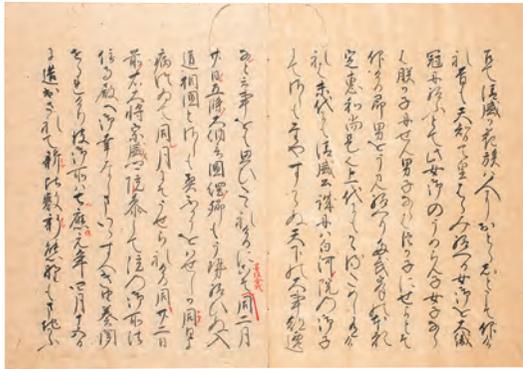
南北朝期写
一部異本校合あり
縦20種 横14.2種 綴葉装 帙并箱入



14 源氏物語 五十四帖

5,500,000円

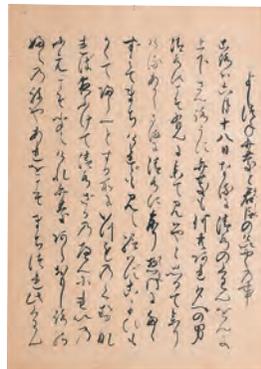
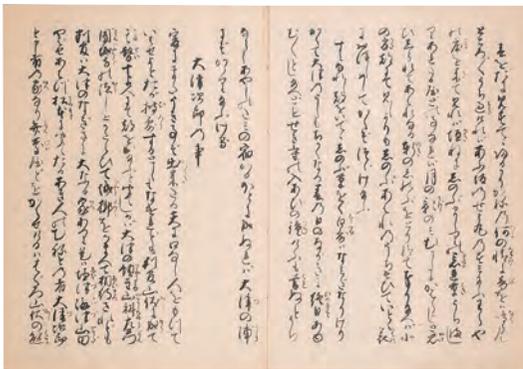
入江相尚筆 江戸中期写
外題・伝正親町公通筆
青表紙本系統
古筆極書付
各縦15.6種 横15.6種 綴葉装
金梨地菊唐草模様金銀蒔絵源氏簞笥并春慶塗箱入



15 平家 十二帖

12,000,000円

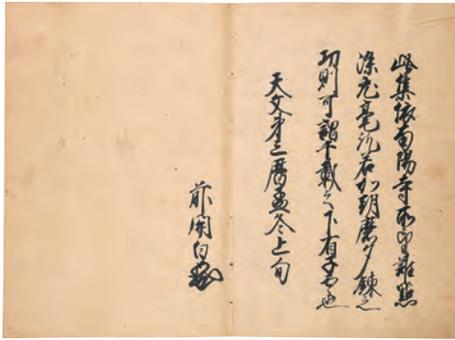
伝飛鳥井雅親筆 室町中期写
 京師本系統
 神田定常折紙付
 各竪27.5糎 横19.8糎 綴葉装 箱入 一部虫・一部浸入



16 義経記 八帖

935,000円

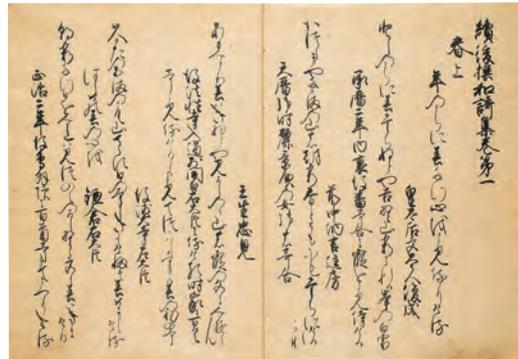
江戸前期写
 表紙・紺紙金砂子散金霞引金泥下絵入
 題簽・金砂子散金泥下絵入
 各竪23.5糎 横17糎 綴葉装 箱入



17 千載和歌集 二帖

660,000円

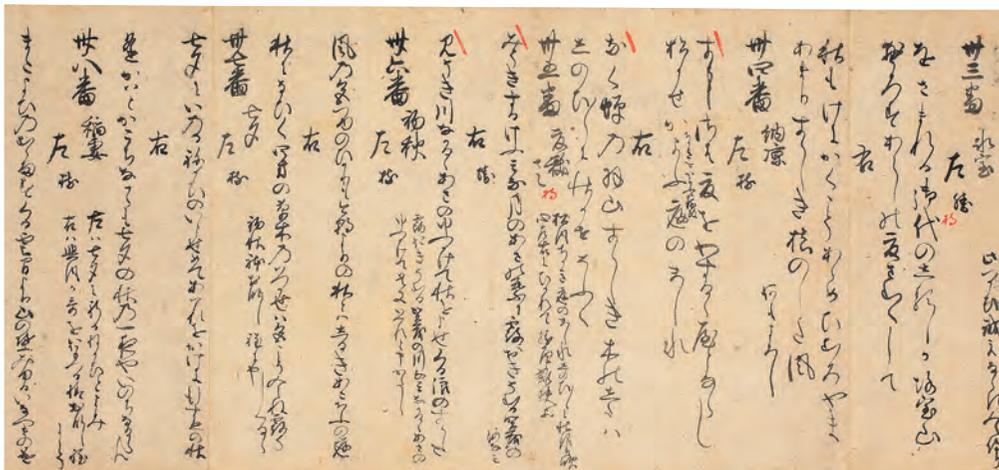
〈卷上〉伝大炊御門経孝筆 江戸前期写
 〈卷下〉天文三年近衛植家筆
 古筆下仲極札付
 各竪25.6糎 横17.4糎 綴葉装 箱入 一部浸入



18 續後撰和歌集 二帖

2,000,000円

室町中期写
 精撰本系統
 各竪26.4糎 横18.6糎 綴葉装 箱入



19 四序歌合 一卷

3,000,000円

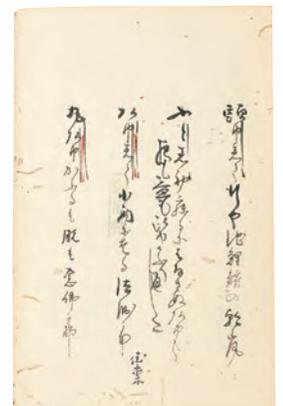
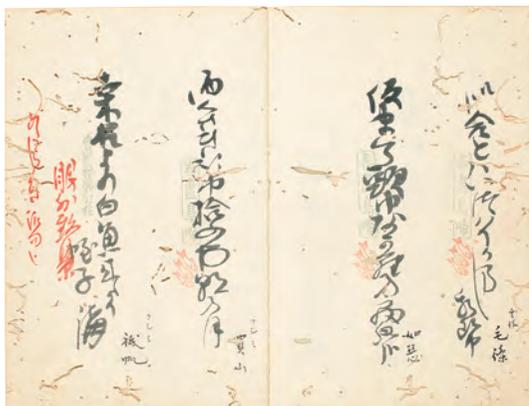
後崇光院・葆光院詠 飛鳥井宋雅・冷泉為尹判
 室町後期写
 紙高30.1糎 長さ8米96糎 卷子装 箱入



20 哥仙家集 十五帖 1,650,000円
 江戸前期写 上本
 金泥下絵入料紙
 各竪23.3糎 横16.8糎 綴葉装 二重箱入



21 五十番自詠合 一卷 550,000円
 貞徳五十番自歌合 松永貞徳自詠自筆
 見せ消ちあり
 紙高25.5糎 長さ6米96糎 卷子装 箱入



22 蕪村点帖 一冊 4,500,000円
 天明三年写
 蕪村自筆批点
 竪22.3糎 横16.2糎 箱入 虫入



23 梅松論 三冊

935,000円

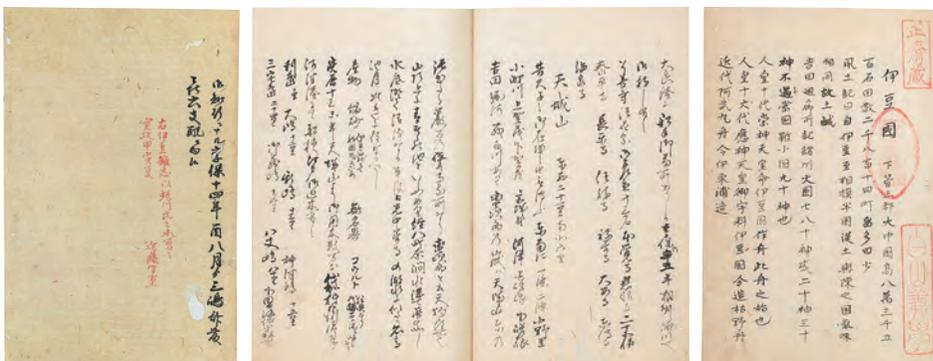
江戸中期写
異本校合・朱書入あり
未刊本 尾張藩徳川家・細野要斎・前田善子旧蔵
和大 帙入 一部小虫入



24 日光巡拝図誌 一冊

495,000円

竹村立義 江戸後期写
彩色図入 三冊合冊
阿由葉鍋造旧蔵
和大 帙入 一部小虫入



25 伊豆雑志 一冊

385,000円

寛政六年近藤重蔵写
奥書に「右伊豆雑志以蜷川氏之本写之」とあり
未刊本 近藤重蔵旧蔵
和半 帙入 一部虫入

近藤重蔵……幕臣。探検家。名、守重。字、子厚。号、正斎・昇天真人。松前蝦夷地御用となり、蝦夷・千高方面を探検した。文政十二年没(59才)。



26 百万塔 付自心印陀羅尼 一基一卷 3,000,000円

奈良時代造
 神護景雲四年刊・無垢浄光經自心印陀羅尼(短)一卷付
 相輪部に墨書あり
 〈塔〉高さ21.7榿 底部径10.5榿
 〈陀羅尼經〉紙高6榿 長さ46.7榿 原装 箱入



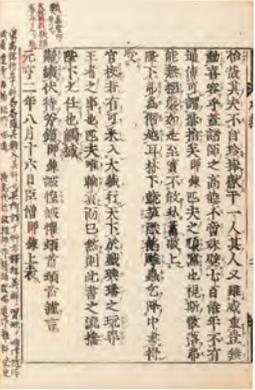
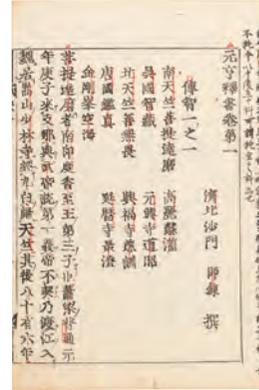
27 伏見版 孫子 一冊 385,000円

慶長十一年刊 古活字版
 縦29.4榿 横20.2榿 帙入 一部虫入



28 明德記 一冊 1,800,000円

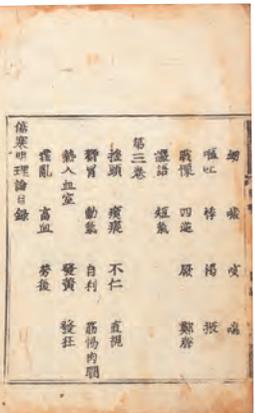
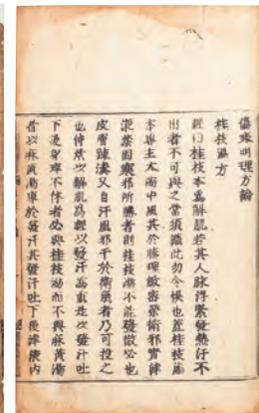
元和三年刊 古活字版
 十一行片仮名交じり本
 縦26.9榿 横18.8榿 帙入 一部虫・浸入



29 元亨釋書 十冊

2,500,000円

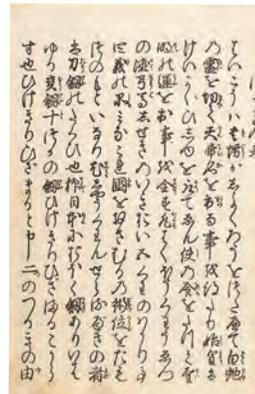
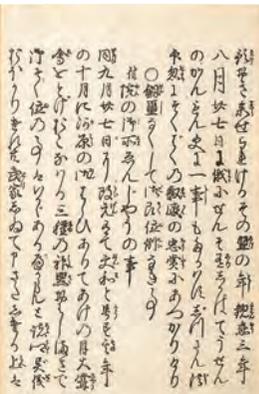
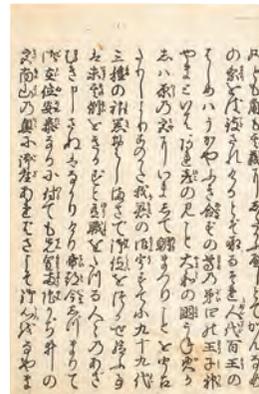
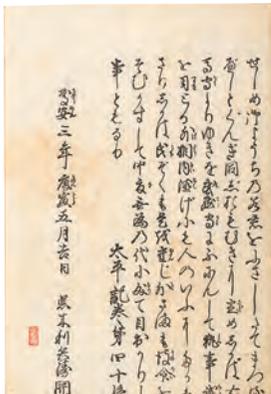
虎関師鍊 元和三年刊 壽閑版
古活字版
各竪28.2種 横20.2種 帙入 一部虫・一部浸入



30 傷寒明理論 二冊

2,500,000円

金・成無己 寛永元年刊 梅壽版
古活字版
各竪28.2種 横19種 帙入 浸入



31 太平記 四十一冊

5,500,000円

慶安三年刊 荒木利兵衛版 古活字版
十一行平仮名交じり本
姫路藩主酒井忠道、フランク・ホーレー、ドナルド・F・ハイド旧蔵
各竪27.7種 横19.7種 帙入 四丁欠



32 源氏物語 五十四冊

1,320,000円

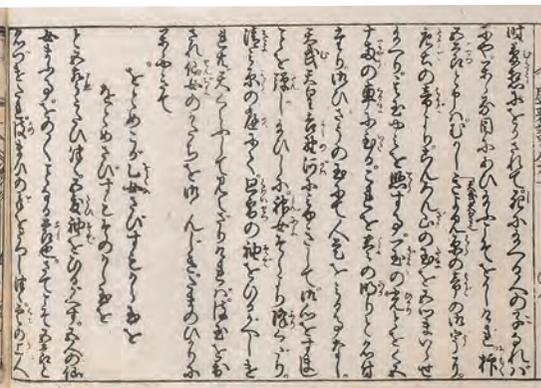
素源氏 江戸初期刊
朱合点・朱墨書入あり
和大 映入



33 首書源氏物語 五十五冊

660,000円

一竿斎 寛文十三年刊 積徳堂版
一部朱墨書入・朱点あり 系図共
和大 映入 一部小虫・浸入



34 源平盛衰記 十二冊

495,000円

横本
宝永四年刊 辻三郎兵衛他版
絵入
和中 映入 一部小虫入



35 哥仙大坂俳諧師 一冊

5,500,000円

井原西鶴編・画 延宝元年序刊

絵入

柿衛文庫旧蔵

縦27糎 横20糎 帙入 一丁欠 浸入 虫・傷み補修済



36 奉納妹背寿 三冊

935,000円

富川吟雪画 江戸中期刊

稀本

巻下・元題簽付

各縦17.7糎 横12.9糎 帙入



37 曾我太夫染 一冊

132,000円

近松門左衛門作 柳亭種彦修辭 歌川国貞画

文化十四年刊 西村屋与八版

彩色刷表紙

和中



38 花街風流解 三冊

165,000円

大眼子作 栗本伊賀丸補 小山寛嶺画

文政九年刊 玉屋市兵衛他版

絵入 原装元題簽付(傷みあり) 元袋付

和中 帙入



39 解體新書 五冊

1,980,000円

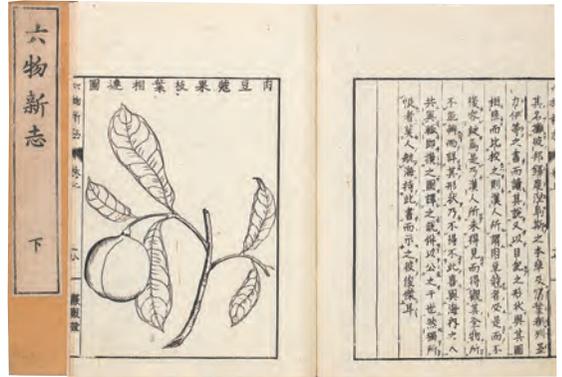
杉田玄白他訳 小田野直武図
 安永三年刊 須原屋市兵衛版
 各竪26.2榧 横18.6榧 帙入 浸入 虫補修(裏打ち)済



40 蘭学階梯 二冊

198,000円

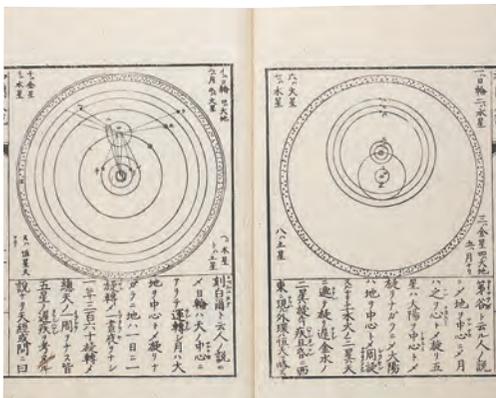
大槻玄沢 天明三年序刊
 原装元題簽付
 本山彦一旧蔵
 和半 帙入



41 六物新志 二冊

220,000円

大槻玄沢 司馬江漢画 天明六年序刊
 図入 原装元題簽付
 和大 帙入



42 和蘭天說 一冊

935,000円

司馬江漢 寛政八年刊 春波楼蔵版
 図入 原装元題簽付
 長谷川延年旧蔵
 和大 帙入 小虫入





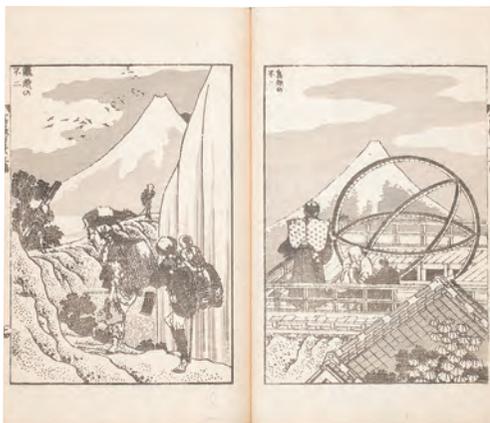
43 絵本 明ほのくさ 二冊 220,000円
 禿帚子 明和八年刊 前川六左衛門版
 合羽刷 『国書』未載
 原装元題簽付
 和半 帙入



44 一勇画譜 一冊 132,000円
 国芳画 江戸末期刊 河内屋茂兵衛版
 彩色刷 原装元題簽付
 和半 帙入 一部虫入



45 画本 山満多山 三冊 1,320,000円
 大原亭炭方撰 葛飾北斎画 江戸後期刊
 上本
 彩色刷 原装元題簽付
 和大 帙入



46 富嶽百景 三冊 935,000円
 葛飾北斎画 明治九年刊 片野東四郎版
 原装元題簽付 元袋付
 和半 帙入





47 名人梅菊画譜 二冊

198,000円

貫輪吉五郎画 明治十四年刊 江嶋喜兵衛他版
一部彩色刷 原装元題簽付
和大 帙入 一部筆彩色あり



48 東京三田育種場種子袋帖 一帖

165,000円

東京三田育種場植物図解・百花辨覧初編
明治期刊
彩色刷 三十一枚
本紙各約縦9.5糎 横10糎 総丈縦11.7糎 横18.7糎 折帖装



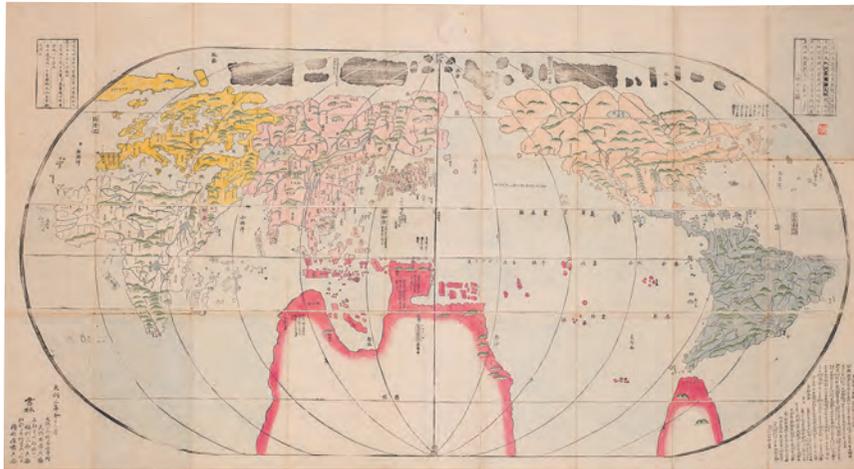
49 桜花図譜 二帖

715,000円

三好学 大正十年刊 芸艸堂版
彩色刷 百十八図
縦26.5糎 横36.4糎 折帖装 元帙入 桜花概説欠 一部浸入

50 万国地球細見全図 一鋪

三六〇、〇〇〇円



三橋釣客 天明三年刊 須原屋市兵衛他版
墨刷筆彩色 元題簽付
茅原元一郎旧蔵
85・1×155・5 糧 疊み物

51 輿地航海図 一鋪

三六〇、〇〇〇円

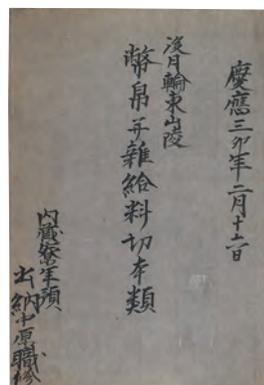
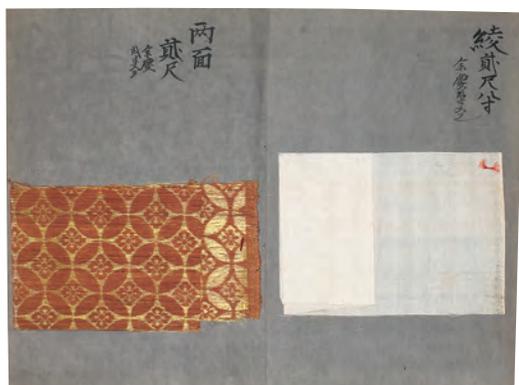


武田簡吾訳 安政五年頃刊
墨刷筆彩色 原装元題簽付
濱口悟陵・茅原元一郎旧蔵
89・4×158・1 糧 疊み物 一部虫入

52 万国綜覧 一鋪

一五、〇〇〇円

大鳥圭介 万延元年刊
墨刷・藍刷 原装元題簽付
大鳥圭介・茅原元一郎旧蔵
90・5×103・3 糧 疊み物 小虫入



後月輪東山陵
53 幣帛并雜給料切本類 一冊

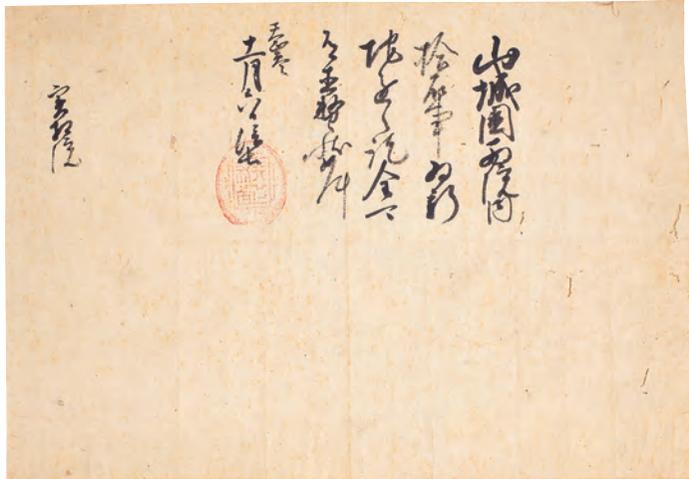
1,650,000円

孝明天皇陵である後月輪東山陵への幣帛・雑給料の裂をまとめた裂帳である。「慶應三卯年二月十六日」との日付が記されている。同日には「孝明天皇」との諡号が関白以下の公卿によって定められ、山陵へ奉幣使が派遣されている。その際の幣帛を記録したのものであろう。それぞれの裂について、名称および長さなどの情報が記された上で、現物が糸で縫い留められている。「別貢物御幣」三十八種、「雑給料御幣」二十二種の、合わせて六十種である。

作成者は「内蔵寮年預出納中原職修」とある。地下官人出納平田家の幕末の当主、平田職修である。平田家は代々藏人所出納を務め、内蔵寮年預も兼ねた。その職掌の一つとして御幣物の調進があり、関連する史料が宮内庁書陵部などにみられる。本資料もそのような役務に関連するものである。

幣帛・雑給料の内容は、ほぼ完全に『延喜式』卷十五内蔵式の「奉諸陵幣」に則ったものとなっており、長さも一致する。当時の朝廷儀礼で扱われていた物品が、現物として確認できる貴重な資料であろう。

総丈豎33.7寸 横25寸 大和綴じ装



54 織田信長朱印状 一通

8,500,000円

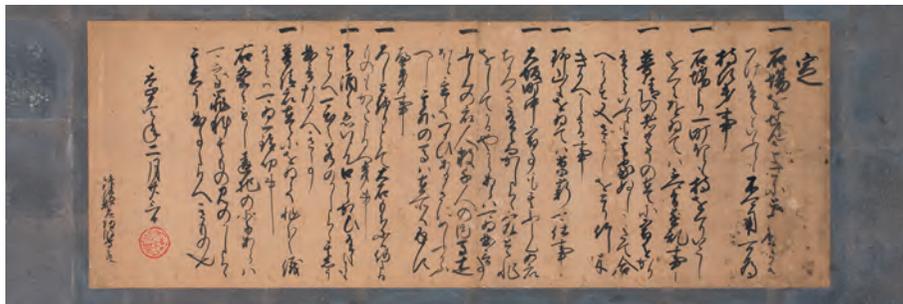
天正参 十一月六日付 実相院宛

天正三年(一五七五)十一月六日に、織田信長(一五三四～八二)が実相院に発給した朱印状。内容は以下の通り。山城国の西院にある十石について、新しい領地として実相院に進上します。支配を全うするようにして下さい。実相院は現在京都市左京区岩倉に所在する天台宗系寺院。寺伝では、寛喜元年(一二二九)に鷹司兼基の子静基が園城寺に入壇受法し、実相院と号したと伝わる。初祖の静基が関白近衛基通の孫にあたることから門跡寺院としての歴史を歩んでいく。

本文書が発給された天正三年十一月六日は、実相院だけでなく公家衆や門跡寺院に広く土地が給与されている。十一月六日の給与は、十月二十七日にそれぞれの知行分を書き立てた事前準備の上で行われており、信長の積極的な対朝廷政策の展開として位置づけられている。こうした信長の対応は、公家・門跡領の近世的な知行体系への編入と庄園制の解体につながる動きと評価され、実務担当者である村井貞勝についても公家・門跡衆への影響力を強めた出来事と考えられている。織田政権の京都施策を論じる上で重要な事件であり、本文書はその典拠として重要な役割を担っているといえる。

このように、信長の公家・門跡寺院への政策や実相院の歴史を考える上で、本文書は興味深い史料と評価できよう。

縦31.8糎 横44.9糎 未装



55 豊臣秀吉朱印状 一面

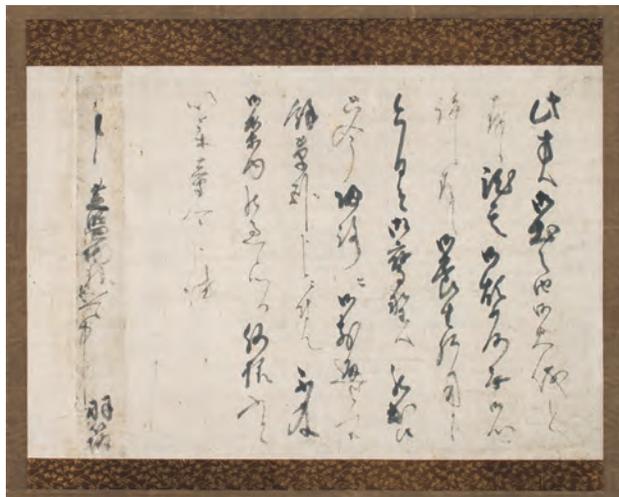
3,500,000円

天正十四年二月廿三日付 蜂須賀阿波守宛

天正十四年(一五六六)に豊臣秀吉(一五三七～九八)が蜂須賀家政に発給した朱印状(定書)。内容は以下の通り。

①石場について、我先にと書付をして利用を主張しても認めてはならない。担当範囲内で利用すること。②石場から一町ほど持ち運ぶことになった場合、勝手な事をしないように。③普請の者達が近隣の村で宿を借りる場合、家主にたてつてはならない。また野宿をして竹木を切ってはならない。④野山で草薪を調達するように。⑤大坂の町中で宿を取る場合、普請の者と知り合いの関係から宿を貸すことは問題としないが、無理やり借りる輩は咎めるように。⑥普請衆千人につき馬を十疋置いて伝達用に利用するように。それ以外の馬は元に戻すように。⑦路地を通る場合、大石の運送は道の片側に寄るように。⑧下々の者が酒に酔い口論となっても捕え召し出すように。逃がした場合、主人の責任とする。⑨普請衆が村々で悪さをすれば死刑とするように。右の条々について、もし背く者がいたならば処罰するように。見逃した場合、主人の責任とする。

文中に大坂が出てくることから、大坂城普請に関わる内容と考えられる。秀吉はこれより先の二月八日、家政に大坂普請を命じ、二十三日に指示を出すのでそれ以前に馳せ参じ、人員を集めるよう求めている。本文書は二十三日付であり、予定通り指示が出されたことが窺える。本文書と同内容のものが一柳直末と加藤嘉明にも出されている。前年の天正十三年十一月には大規模な地震も発生しており、そのことも関連するかもしれない。本紙縦33.3糎 横92.5糎 総丈縦45.5糎 横124.8糎 額装



56 前田利家書状 一幅

5,500,000円

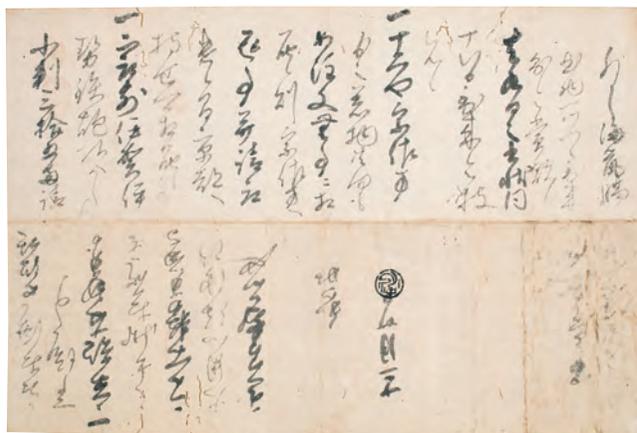
芝監物宛

北陸の武将、前田利家(一五三八～九九)の書状。利家は尾張国に生まれ、幼少より織田信長、その死後は豊臣秀吉に仕えて、宿老大名の筆頭として豊臣政権の中でも重き地位にあった。

本文書は、来意を告げられたことを受け、先方の病状を気にかけて養生を勧めるとともに、鷹狩りの帰路に近くを通ったものの、くたびれていたため会わなかった旨、その日のうちに伝えたものである。

封紙には「羽筑」が「芝監物」に宛てたことが記される。「芝監物」は、豊臣秀吉家臣で千利休の高弟である芝山宗綱を指し、「監物」の名乗りは天正十六年(一五八八)四月から確認できる。この頃「羽筑」を名乗る人物は前田利家であり、天正十三年九月に羽柴姓を許され、筑前守に叙されている。したがって、本書状は利家書状とみて、まず間違いなからう。

本紙縦30糎 横40.1糎 総丈堅117.5糎 横47.7糎 軸装 箱入



57 藤堂高虎黒印状 一通

1,000,000円

十二月廿日付 馬淵半左衛門・百々太郎兵衛宛

安土・桃山時代から江戸時代初期に活躍した武将、藤堂高虎(一五五六～一六三〇)の黒印状。近江国の出身で、浅井長政・羽柴秀長・豊臣秀吉に仕えた。関ヶ原の戦いでは東軍に属し、伊予今治藩主から伊勢津藩主となって、三十二万石余を領した。築城の名手として数々の作事に従事したほか、茶人としても著名であった。本状の内容は以下の通り。

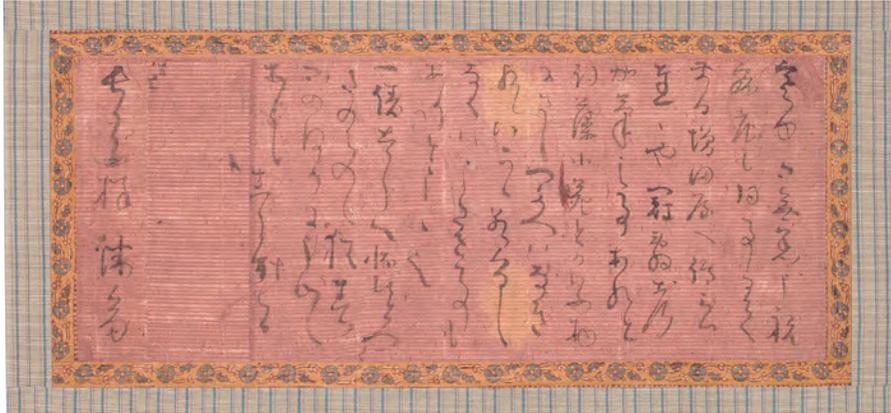
一、十二屋(藤村)宗佐から着物などの品が注文の通りに届きました。宗佐への返事と請取状を遣わしますので、京都へ持たせて届けるようにしてください。

一、最近、伊賀・伊勢の鉄砲頭へ貸した小判三十五両の返済を受けたことを組頭へ申し渡すようにしてください。

一、京都の友甫方からの書状が届きました。そちらの所務方は留守でした。大いに用心し、決して油断があつてはいけません。

宛先は、摩滅が激しく判読困難だが、おそらく藤堂家の家臣である馬淵半左衛門・百々太郎兵衛の両名に宛てられていると思われる。文中にみえる十二屋宗佐は京都の呉服商。その養子である藤村庸軒は、庸軒流茶道の開祖として著名である。

縦36.6糎 横53.5糎 原装



58 上田秋成自筆書状 一幅

550,000円

十二月十七日付 長兵衛宛

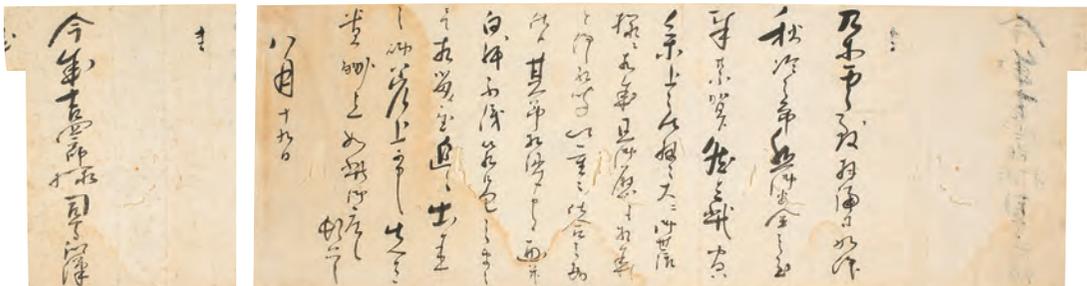
宛先の「長兵衛」は、大坂の書肆、奈良屋長兵衛と考えられる。内容は次の通り。

寒中御無事の喜びは、「病老」の私においても同様です。前日、「増田屋」(大坂書肆、増田屋源兵衛)に対し、『冠辞考』の加筆の件があるけれども、『詞草小苑』とかいう書物に(出版上の)支障はないか、と伝言しました。また、「俵太郎」へ宛てた書状一通を(彼に渡すよう)頼みます。

『冠辞考』の加筆の件とは、長兵衛らが刊行する予定の『冠辞考』再刻版の校訂か、もしくは、秋成の『冠辞統紹』執筆のことかと推察される。また、右の「俵太郎」は、池永秦良(秋成の門人で、大坂の俵屋太郎吉)と考えられる。

なお本状は、寛政五年(1793)六月に秋成が京都へ移住した後のものと思われ、同七年冬に秋成と秦良との間に確執が生じたことを踏まえると、寛政五年か六年の書状と比定される。秋成を取り巻く書肆とのやり取りや関係性などが読み取れる、興味深い書状といえよう。

本紙縦14.8糎 横36.2糎 総丈縦113.2糎 横43.2糎 軸装 箱入



59 司馬江漢自筆書状 一通

1,500,000円

八月十九日付 今成吉四郎宛

近世後期の洋風画家・蘭学者である司馬江漢(一七四七~一八一八)の書状である。宛先の今成吉四郎は米沢藩士で、上杉鷹山の藩政改革に際し、郷村出役などを務めた人物である。

内容は、江漢が今成のもとを訪れた際の礼を述べ、御慰みにもなったと聞かされて嬉しく思っているとす。また、その際に描いた絵と画材を手元に留め置いており、完成次第差し上げると伝える。

江漢は江戸の町家の生まれで、はじめ狩野派に入門した後、浮世絵師鈴木春信の工房で画業を本格化させ、その後、南蘋派の宋紫石のもとで漢画を学んだ。既存の画風に満足しなかった江漢は、更に前野良沢ら江戸の蘭学者と交わって洋風画の技法を学び、彼らの協力を得て天明三年(一七八三)、三十七歳の時に日本で初めての腐食銅版画の制作に成功した。江漢は近世日本における洋風画の先駆者として有名で、彼自身、俗に流れる日本画に対して実用絵画としての西洋画を貴んだことも事実であるが、彼の多様な作例に見られる如く、江漢の画技は和洋両面において秀でており、また世界地理や天文に関する著作を出版するなど、当代に名を知られた一流の蘭学者でもあった。こうした技能を見込まれ、彼は仙台藩主伊達重村や土佐藩主山内豊雍といった大名などにしばしば招かれ、即席で画技を披露している。

本書状でも米沢藩士である今成のもとを訪れた席上で絵を描いたことが知られ、江漢の旺盛な画業の一端が窺われて興味深い。これまでに知られてこなかった江漢の交友関係を示す史料としても貴重な文書といえるだろう。

縦17糎 横49.5糎 原装



60 明治天皇御勅書 一冊

15,000,000円

明治十五年十二月七日付 布哇国皇帝陛下宛
 「睦仁」御宸筆 「天皇御璽」朱方印押捺

明治天皇(一八五二～一九一三)がハワイ国王カラカウアへ宛てた親書である。王の戴冠式が行われるに際して、その祝賀のために特命全権公使を派遣することを伝えるもの。御宸筆の名(「睦仁」と「天皇御璽」)の印が捺されている。内容は次の通り。

日本国皇帝が謹んで良友であるハワイ国皇帝に申す。外務卿井上馨の奏報によって、陛下および皇后陛下が一八八三年二月十二日にホノルルのイオラニ宮殿で戴冠の大礼を挙行されることを聞き、まことに欣喜に堪えない。ここに朕の信愛する宮内大輔杉孫七郎を特命全権公使に兼任させ、宮殿に遣わしてその盛典を賀し、かつ朕の懇親の情を示す。陛下の統治のもとで貴国臣民の福祉がますます加わり、貴国と我が国の友誼がいよいよ親しくなることは、朕の深く信じるどころである。ここに陛下の安寧を祝し、あわせて皇室の繁栄を祈る。

カラカウアはハワイ王国の第七代国王である。一八七四年に選挙で王になったカラカウアは、一八八一年に世界周遊を行っており、その途上で日本にも滞在し、明治天皇とも会見している。この時、王女カイウラニと皇族(山階宮)との婚姻の打診の話もあった。カラカウアの戴冠式はその三年後にあたる。戴冠式へ参列したのは杉孫七郎・長崎省吾などで、いずれもこれ以前にハワイへの使節を務めたことがあった。

この親書は伝来も独特なもので、もとはハワイの元王族・政治家ジョナ・クヒオ・カラニアナオレが所持していたものを日本人実業家が買い求めたものという。後には頭山満が保管していた時期もあった。そのほか伝来については、カラニアナオレの書状(一九一七年)をはじめとする付属文書に詳しい。

竪33.3㎝ 横23.5㎝ 二重箱入